

内川目地方の伝説

猫底金山の話 昔、猫底金山が最も盛んなころには、現在、気仙長根と呼ばれているところに、飲食店があった。世帯数は常時八百戸もあり、金山で働いていた人々にとっては、いこいの場所でもあった。

金山で掘った鉱石は、精錬所に運ばれ、精錬された。やがて、坑道は深くなった。すると、金が猫の足のように鉱石に入っていた。だんだん奥へ行くと、猫の形の金に追いついた。人々はなんとかして、この猫形の金を取り出そうとして太い綱で引き出した。

ところが、一瞬、石山がくずれ落ちて、とうとう引き出すことができなかった。

現在の「猫底」という地名は、この時から呼ばれるようになった。

(「大迫の昔ばなし」)

猫底金山について

藤原 勇

猫底と言う（標高 400m）一風変わった地名の集落があります。四方を山に囲まれた二筋の沢に挟まれた現在は五軒の家があります、その歴史はさだかでは無いのですが相当古代から人間が住んでいた形跡があります、その形跡は山の斜面を切り開いて田んぼを耕している時には縄文時代より古い石器時代の石斧や石の矢じりが出土した位です。道路は行き止まりになりここから出るには来た道を引き返すか徒歩で急な山を徒歩で行くしかありません。

ここには何時ごろか判らないが古い時代より金山があり金鉱石を採掘されてきました、最盛期には集落には 800 軒程の集落だったとか、酒場はもとより遊郭まであり賑やかだったと古老より聞いて育ちました、猫底と地名は猫の形をした金鉱石あったとか別の話では猫の足の形をした金が出たので本当は猫足（ねこそく）言う地名だったとも言います。

昭和 30 年代にも金採掘をしていました、子供の頃古い廃鉱になった場所をスコップで入り口を掘り出して中を探検しました、縦穴や横穴があり横穴は腹這いで進むしかない位だったのを覚えています、昭和の頃の坑道はトロッコで運ぶ為随分広かったと記憶しています、坑道はよく考えられていて枝分かれになっていて新しい坑道を掘ったら古い坑道に余分な鉱石を埋めて行くような方法を取っていたようです、そのための外に運び出す鉱石は最小限にしていたようです。掘って行くと水が出てきますのでその水を利用して水道に使用している家庭もあります。

いずれにしる隠し金山だったのでは？と思われ、地名も鍵掛場（かぎかけば）とか板屋館（いたやだて）とか火の沢（溶鉱炉があったのでは）とか小さな集落には不釣合いの山の神の社があるとか・・・宮沢賢治も来た事があるとか・・・

